

日本労働年鑑 1951年版(第23集)
The Labour Year Book of Japan 1951

第一部 労働者状態

第六編 農家の状態と農民の生活

第三章 農民の生活状態

第二節 教育文化施設と文化水準

農村における教育施設と名つくべきものは、中小学校をのぞいては公民館くらいのものであるが、その公民館は戦後文部省の設置奨励で一九四七年末には全国三、六三〇カ町村に設けられた。(全国町村の三五%に当る)とくに多いのは京都府で町村の六六・八%、福岡では六六・三%、福井五四・七%、宮城五〇・八%という普及率である。滋賀、山梨、三重県などはこれに反し普及率は低い。

公民館は各種の教育啓蒙のため講演会や講習会の開催、図書館の設置の外に運動競技などをも主催する。また農繁期の託児、育児所の開設や、巡回診療、生活相談、式服の共同利用等をおこなうところもあり、運用の如何によつてはかなり農民教育に役立つている。しかし全般的にその施設は貧弱で、映写機、幻灯機などを有するものは少なく、図書館といつても年予算は五〇〇円から、五、〇〇〇円程度のものが多いのであるから、その内容はいたつて粗末なものが多い。

農家におけるラジオの普及率は四七年八月センサスの結果によれば、全国平均四八%で、農村は都市より普及率は高い。これを県別に見れば神奈川、大阪の八〇%を筆頭に、東京七五%、埼玉七三%が多く、北海道や東北地方、九州南部などは三〇-四〇%の低位にある。一般に商業的農業の発達した地方、京浜、阪神等大都市近郊の農村に普及率高く、東北、九州、四国等の遠隔農村に低い。これは大体農村の文化水準を反映していると見てよい。またラジオ放送に対する関心を全国九一村につき調査せる農林省農業改良局「農民生活と経営の実態調査報告」第一報(昭和二五年一月三一日刊)によれば、農民の青壮年層を通じて、ニュース、天気予報のほかは浪曲、歌謡曲を聞くものが圧倒的といつてよいほど多く、農村の一般文化水準が推察される。

農民の講読する新聞は「朝日」「毎日」「読売」三紙のほか、全国新聞情報農協連合会発行の「日本農業新聞」や、「農業復興」「農民の友」その他日農機関紙等二、三しかなく、とくに商業新聞をのぞいては、新聞の普及率はきわめて低い。農業雑誌については前掲「農民生活と経営の実態調査」によれば「家の光」「富民」「婦人クラブ」「農業朝日」「農業毎日」「農業日本」等が多いようであるが「リーダーズ・ダイジェスト」や「ロマンス」その他娯楽雑誌もかなり普及している。戦後四七、八年頃まで「若い農業」「地上」等進歩的傾向の雑誌が普及しかけたが、四八年末以来の恐慌下に、読者は急減しつつある現状である。

全国の映画館分布を見るに、その六二%は都市に、三二%は農村に設けられているが、施設の少いこと、観覧料の高いこと等の理由で農民の利用はかぎられており、壮年以上の農民、とくに婦人の中には、未だかつて一回も映画を見たものがないというものがかかなりある。しかし戦後農村民主化の気運が盛んになり、青年婦人の解放は農民組合活動や、文化活動の活発化となつて現われた。前進的な農村では青年婦人による自主的な文化サークル、研究会等がもたれ、とくに終戦後

より四八年頃までは各地でかなり普及した。

農民の智識水準の低さや文化生活の内容の貧しさは、前節「農家の生計費」中、教育費、娯楽費等の「文化費」の比率によつて推定される、すなわち四八年度の農家家計費(全国平均一戸当り)一四四、四四八円中、教育費は一・七%修養娯楽費は一・九%にすぎず結局農民は文化費としてその家計費のわずか三・六%しか支出していないのである。

日本労働年鑑 第23集／1951年版

発行 1951年1月1日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年2月15日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1951年版(第23集)【目次】 次のページ→ ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
